



2020年(令和2年)
10月号(No. 905)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に
含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

『日本奥地紀行』を著わした
イザベラ・バードの足跡をたどる … 1
日本山岳会が選ぶ
『日本の山岳古道120選』調査事業スタート … 5
コロナ禍の下、支部合同会議を開催 … 6
火打山の環境保全活動に参加して
～ライチョウ生息環境の改善を目指して～ … 7
「1968年ウシュノ峰の夏」に感動と歓声 … 8
山に囲まれ、山と向き合い、人との輪を広げる … 10
今春の伯耆大山における滑落事故報告 … 11
東西南北 …… 12
活動報告 山行委員会 …… 14
支部だより 四国支部 …… 15
図書紹介 …… 15
新入会員 …… 16
会務報告 …… 18
ルーム日誌 …… 19
会員異動 …… 19
INFORMATION …… 18
編集後記 …… 19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
★新型コロナウイルス感染防止対応のため、当分の間、取扱時間を短縮します。平日13時～20時

『日本奥地紀行』を著わした イザベラ・バードの足跡をたどる

『日本奥地紀行』の旅・研究会

本稿の後、5ページに告示されているように、「日本の山岳古道120選」調査プロジェクトが始まるが、その支援寄稿第2弾。英国の女流旅行家イザベラ・バードの著作『日本奥地紀行』を片手に、その足跡をたどった名古屋大学WV部OBたちの体験から、最も印象に残った山間の峠道のいくつかを紹介してもらった。

135年後の追体験

気鋭の英国女流旅行家イザベラ・バードは、1878(明治10)年4月に来日し、横浜に第一歩を印した。彼女の目的は、蝦夷地の平取への旅である。平取は当時、アイヌ民族が多く住む地域として、欧米人の注目を浴びていた集落である。

しかし、なぜか彼女は横浜から船で函館へ向かわずに、あえて日数も掛かり難渋する東日本を陸路を迂回、青森経由で函館に向かう道を選択したのである。もちろん明治初期の田舎には洒落たホテルがあるはずもなく、泊まるのは蚤虱が跳梁跋扈する旅籠、食事は米飯に味噌汁と黄色いピクルス(たぐあん)、しかも通訳兼従者の日本

人の若者一人を連れただけで……。彼女は帰国後この冒険旅行記をまとめ、1880年にJ・マレイ社から『Unbeaten track in Japan(日本奥地紀行)』を出版した。それから135年後の2013年5月、平均年齢70歳弱の名古屋大学ワンダーフォーゲル部OBたちが、「バードの足跡をたどるプロジェクト」を立ち上げた。プロジェクトは年に2回ほど3泊4日の旅を繰り返して、ようやく17年5月に11回目で完結した。参加者は毎回9～10名、延べ人数は109名に達するビッグなプロジェクトとなっていた。さらにものの弾みで、『ザック担いでイザベラ・バードを辿る』(2017年、あけび書房)なる紀行録を上梓してしまっただけである。興味が

ありの方は、ご一読いただければ幸いです。さて、バードはこの旅に約3ヶ月を費やしている。私たちも忠実に彼女の旅のトレースを試みるが、彼女のたどった街道の多くは基幹国道となっており、側道を歩くのはこの上なく危険である。排気ガスを全身に浴びて歩くのも、心地良いものではない。ということで、トンネル開鑿後使用されなくなり、忘れ去られた峠道を丹念に拾って歩くことにした。正直なところ、彼女が私たちと同様に「峠ハンター」かと問われれば、答えは明らかに「NO!」である。「土木県令」三島通庸の施策を高く評価していることから分かるように、彼女にとって峠は旅の障壁以外の何物でもなかった。



鳥居峠付近から飯豊連峰を望む

バードはこの旅で26の峠を越えている。そのうち眺望が良いとお褒めにあずかったのは、山王峠・中山峠（会津西街道）、東松峠（越後街道）、桜峠・宇津峠（越後・米沢街道／十三峠）、矢立峠（羽州街道）の6峠。逆に気丈な彼女でも音を上げた苛酷な峠として「汚名」を残したのは、車峠・鳥居峠（越後街道）、主寝坂峠・雄勝峠（羽州街道）の4峠である。これに蝦夷三大難所として有名であった札文華峠（蝦夷）と、私たちがぜひとも推奨したい黒沢峠（十三峠）を加えて、追体験を紹介したい。

なお、私たちが踏破したのは25峠で、道が整備されていない十三

峠の大久保峠を残している。

越後街道 車峠・鳥居峠

JR磐越西線上野尻駅で降り、旧越後街道を下野尻集落方向へ道を取る。私たちは集落境で右折し、根柢神社へ向かう。神社横に見落としやすいが車峠入り口の標識がある。旧道は穏やかな勾配で、荷馬車が通るにも支障はない。ゆっくりに30分ほど歩くと車峠（標高277m）に出るが、手前の茶屋跡には丁寧なバードの説明板がある。峠から先は草が繁茂し、湿地化している所もあり、多少歩きにくい。が、車トンネルが開通する1970年までは現役の国道49号だけあって、幅広く、勾配も緩い。

車峠を下って白坂、宝川の集落に向かう。ほとんどハイカーも訪れない所なのであろうか、土地の人との短い会話も心地良い。「どこから来たの?」と問われて、「東京周辺から」と答えると少しびっくりされるが、親切に「少し先のトントン清水はおいしいよ。飲んでいきなさい」などと教えてくれる。鳥居峠（199m）への道を探ねると、旧国道49号と古い山道の2

つの峠道があるという。バードの記述を信じれば山道であろうと、宝川集落境で現国道49号を横切り、山道へ入る。確かに道は直登と言えなくもないが、相変らず幅広く穏やかな勾配である。チゴユリやワラビなどを捜しながら45分ほど歩くと、いつの間にか旧国道に出た。右手には福島・新潟県境の標識が、左手には馬頭観音碑が残されているので、峠と分かる。

少し降りた所で飯豊連峰が青空に映えているのが目に入り、私たちの旅を歓迎してくれているようである。バードが通ったときは雨で、道もぬかるんでいたというから、晴天であれば彼女の印象も違ったに違いない。約10分で八ッ田集落に到着、津川に向かう。

羽州街道 主寝坂峠・雄勝峠

山形県金山町から国道13号を北上し、主寝坂峠（410m）を目指す。1960年に、交通渋滞緩和のため主寝坂トンネルが建設され、峠道は廃道となった。旧道へはト



ここまでは快適だった主寝坂峠。山は丁岳山地東端の甌山

ンネル手前右手側から入る。道幅も広く、傾斜もさほどきつくない。快調に飛ばすが、それも峠までであった。

下りに入った途端に道も悪くなり、ついにはヤブに覆われて見えなくなる。かつて道であったであろう、平らな所を選んでヤブこぎして進むものの、なかなか捗らない。やむを得ず下の国道に降りることにするが、旧道からは5〜6mほどの高低差がある。足場、手掛かりのある法面を捜して慎重に降り、及位集落へ急ぐ。



直進が礼文華山道古道。右に降りると礼文華山道(旧国道)

雄勝峠(423m)も主寝坂峠と同様、国道13号の難所であったが、1955年に雄勝トンネルが完成し、廃道となった。そのトンネルも交通量増加により1981年に新トンネルが造られてからは、入り口が閉鎖されている。

JR及位駅手前で現国道から旧道へ道を取り、山形県側の旧トンネル入り口左手にある、工事殉職者慰霊碑横にかすかに残る踏み跡を頼りに登り始める。かなりの急傾斜の谷筋を、灌木や雑草の根元をつかんで登ること15分、旧羽州街道跡とおぼしき場所に出る。さらに街道跡を5分ほど上ると、雑

草が生い茂る広い切通しに出た。これが雄勝峠である。秋田県側も道はほとんど崩落しており、谷筋を下る。およそ30m下った所で街道跡が見付かり、さらに下の方に錆びて朽ちつつあるスノー・シェッドが目に入った。旧国道である。最後は現国道に合流し、秋田県院内へ向かう。

バードは、これら4峠について、「現代的な着想などはなから無視して、この道は私には見当すらつかない勾配で山を真直ぐ上り下りし、今は完全な泥沼となっています。……これまで旅した中でもまさに最悪の道だと言えば、よくわかるでしょう(車峠・鳥居峠)」「厳しい峠越えの2ヶ所ある酷い道で、私はほぼ全行程を歩かなければならなかったばかりか、難所では何度か車の引手に手を貸さねばなりませんでした。……難儀して抜けた泥道の深かったこと、主寝坂峠と雄勝峠を越え、12時間かけて踏破した距離は15マイルだったこと(主寝坂峠・雄勝峠)」「(時岡敬子訳『イザベ

ラ・バードの日本旅行』講談社学術文庫より引用)

と、表現しているが、上り下りのきつさから言えば、後述する黒沢、宇津峠も決して引けを取らないし、高低差は逆に大きい。主寝坂峠・雄勝峠は、私たちにとってもきつい登り降りであったが、多分に道が崩落し、失われていることによるものである。

彼女の印象を大きく左右したのは、敷石もなく泥沼化した道を、徒歩で登ることを強いられたからであるうか。英国の貴婦人には我慢ならないことであったに違いない。不運なことに、彼女が訪れた年は30年来の長雨・豪雨に見舞われた年であった。長雨の切れ間の快晴に恵まれた宇津峠では、「東洋のアルカディア!」と叫ぶくらい、気分良く峠越えをしているのである。

蝦夷 礼文華峠

礼文華山道は、明治初期には猿留山道、雷電山道とともに蝦夷地の三大難所の一つに数えられていた。しかし、バードが歩いた道(礼文華山道古道と呼ぶ)の大部分は廃道となり、礼文華山道(旧国道37号)に取り込まれて、東部分に少

し残っているのみである。私たちは、彼女のたどった道とは逆になるが、長万部からタクシーで「礼文華峠入り口」へ向かった。礼文華山道は旧国道でもあり、道幅は広く、勾配も緩やか、峠入り口から礼文華峠(293m)までの高低差は60m程度、すこぶる快適な山道である。しかし、当時の礼文華山道古道は、峠の北側の尾根依いに開削されていたようである。

チャールス・ロングフェロー(詩人ヘンリー・ロングフェローの長男)は、1871(明治4)年に北海道を訪れ、礼文華峠を越えている。

長万部から海岸沿いに道を取り、礼文華峠手前から峠を避けて船で迂回する予定であったが、船頭は海が荒れて危険だと言う。やむを得ず山越えの急な坂道を3時間半余歩き続け、礼文華に着いたと記している(『ロングフェロー日本滞在記』)ので、それなりに厳しい山道であったに違いない。今後、礼文華山道古道の全容が明らかにされることを待ちたい。

越後・米沢街道 十三峠(黒沢峠・宇津峠)

新潟県関川村から山形県小国町に続く十三峠の魅力の一つが、街道の敷石群である。敷石は萱野峠、朴ノ木峠、黒沢峠で復元されているが、なかでも黒沢峠(426m)の敷石は3500段もあり、最も規模が大きい。

峠入り口の黒沢集落を通りかかったときに、声を掛けてくれる人がいた。「黒沢峠敷石保存会」の保科一三会長である。今から会のメンバーと一緒に敷石道路の補修に入るところだと言う。私たちが往時の雰囲気を楽しむことができる



きれいに整備された黒沢峠の敷石道

背景には、このような地元の方々
の並々ならぬ努力がある。

国道113号を小国町から米沢方面に進む。間瀬橋を渡った先で右手の旧国道へ折れる。入り口の沼沢公民館が立てた案内図には、「現在の峠道」と「十三峠の道(通れませんが)」が示されている。多分十三峠の道が、バードがたどった道であろうと思われるが、選択の余地もなく「現在の峠道」を選ぶ。この道は、三島通庸が開鑿を命じた小国新道の後継であろう。

1967年に宇津トネルが完成してからは、峠道は使用されなくなり、さらに1992年、新宇津トネルの開通により、旧トネルも閉鎖された。彼女が感激した米沢の平野(置賜盆地)は、宇津峠(491m)からは見えないが、少し下がった所から一望できる。峠からは小国新道も旧街道と一緒になっており、道は九十九折りで、雪崩の頻発する難所でもあった。

ところで、越後・米沢街道十三峠には、再び訪れる

機会があった。十三峠の保全に力を注いでいるNPO法人「ここ掘れ和ん話ん探検隊」が主催した「第5回イザベラ・バードin十三峠(2016)」に参加したとき、「ガイド」として同行されたのが平田大六氏であった。小兵ながら引き締まった体躯、ビンテージもののザックの口から鉈の柄が見え、ただ者ではない雰囲気。後からお聞きすると、地元新潟県関川村の村長をされており、日本山岳越後支部の重鎮だと言う。日本山岳会会員の中には、お目に掛かれた方も少なくないであろう(本当のエピソードは、私たちの本に満載!)

*

最後に、バードの非凡な才能は、この本を単なるガイドブックに留まらせていない。彼女の情報収集努力と観察眼は、通りすがりの集落の風景、訪問地での指導層との対話から日本人や日本社会の特性、課題を冷徹に、鋭くえぐり出している。

さらにこの本の後半部では、伊勢神宮を含む関西方面へ足を延ばし、同志社の新島襄、浄土真宗の赤松円城との対話から、日本人の



宇津峠から少し下がった所から「東洋のアルカディア!」置賜平野を望む

宗教観への理解を深めている。結論は、日本人の優れた科学技術吸収能力に感嘆しているものの、「大地にしっかりと根を張る努力を省き、実った果実だけを採り入れる」という実利至上主義に、日本の将来に大きな危惧を抱いたのであった。

(名古屋大学ワンダーフォーゲル部OB 岡田常義・記)

NOTICE

日本山岳会が選ぶ「日本の山岳古道 120選」調査事業スタート

山岳古道調査PT 近藤雅幸

消えゆく山岳古道に光を

このところ道路の拡充、インフラの整備、災害、さらに山村の過疎化によって、昔、多くの人に利用されてきた古道は至る所で破壊され、崩れ、ヤブに埋もれて、そういう道があったことさえ人々の記憶から消え去りつつあります。しかし、昔の人々は貴賤を問わず、老いも若きもその道を通じて生活を営んでいました。

今、私たちは、そういった古の人々が生きた証を発掘して記録に残し、未来の人々に伝えていく必要があるのではないのでしょうか。そのためには古道を調査し、報告書を作成して公開することが、その土地に住む人々が自分のルーツを考え、地元を見直し、さらにはそれぞれの場所に対する愛着を再発見してもらうため、ひいては、日本という国が本来どのような姿であったのかを考えるための、縁

となるのではないかと思います。

日本山岳会は創立120周年を迎えるに当たり、記念事業として、支部・本部を中心にこのような古道、特に山岳古道の調査を全国的に行なうこととなりました。

プロジェクトのタイトルは、(日本山岳会が選ぶ「日本の山岳古道120選」としました。確かに120周年を念頭に決めたタイトルではありますが、実際にホームページでの公開と書籍化を考えた場合、対象とする山岳古道の数としてはこのくらいが適切でしょう。

文献などにも当たって情報のデータベースを作成。それを基に後々まで残る報告書を出版し、できるだけ各地の図書館にも入れてもらった上で、ネットでも広く公開することにします。極力学術報告書的なものにはせず、誰でも興味を持って、楽しく見ることが出来るガイドブックまたは読み物のような書籍を刊行するつもりです。

それによって、日本および地方のアイデンティティを再認識してもらい、加えて、新しい山の楽しみ方を提案し、山岳古道がある地域の活性化に貢献できること。さらに内部的には、各支部の活性化と本部・支部間、あるいは支部同志の垣根を超えた連携強化、そして会の知名度向上、会員増を図っていただけら素晴らしいと思います。

全会員参加のプロジェクトに

このプロジェクトを実現するためには、日本山岳会の全国33支部をはじめ、できる限り多くの会員の調査への参加が必要です。また、地元で古道研究家らの協力も仰ぎながら、2025年の発表を目指します。さらに、HPなどを通じて外部の賛同者を増やし、最終的には大きなうねりにしていこうと考えております。

まずは調査対象となる120の古道(枝道を入れるとさらに多くなる)を選ぶことから始まります。支部や本部の委員会・同好会は最大5ヶ所、個人は3ヶ所の古道を推薦してください(2021年3月末まで)。推薦いただいた古道から山岳古道調査プロジェクト・チー

ムで120の古道を選択・決定し、支部や会員有志が中心になって調査を行なってまいります。

古道は日本全国から万遍なくピックアップしていくつもりですが、まずは山岳古道(旧道・廃道)、もしくは山に関わる道であること。できれば、現在は脚光を浴びることなく、整備されておらず、忘れ去られようとしている古道を主な対象としていこうと考えています。たとえば、塩の道(千国街道)で言うと、白馬村以南は対象にならないが、小谷村以北は対象になるというイメージでしょうか。

2025年まで時間の掛かる大きなプロジェクトですが、会員の皆さんの力を結集して、なんとか後世に残る良いものを創り上げていきたいと思っております。

◆事業の詳細や推薦用紙はHPの【日本山岳会創立120周年記念事業】→【全国山岳古道調査】に入って確認・入手してください。

各支部には先日の支部合同会議で配布しましたので、紙の用紙で推薦したい方は、それを利用してFAXか郵送で本部宛にお送りください。もちろん要件さえ満たしていれば自作の用紙でも構いません。

REPORT

コロナ禍の下、支部合同会議を開催

総務担当常務理事 永田弘太郎

9月26日(土)、東京・四谷にある主婦会館プラザエフで、令和2年度支部合同会議を開催した。今回は新型コロナウイルスの感染防止のため、リアルな会議とオンライン会議(ズーム)を併用しての会議となった。加えて、この会議をオンラインで中継(ユーチューブによる動画配信)し、広く会員にも公開した。

例年であれば会議は2日間におたつて行なわれていたが、1日に短縮し、懇親会なども行なわない簡略的なものにした。

当日、収容人数183名の会場には、支部長11名(代理を含む)、事務局長4名が出席し、理事、総務委員会、DM委員会のスタッフなどと合わせ30名が参加した。オンラインでの出席は支部長18名、事務局長17名だった。

オンラインという性質上、報告中心の内容にならざるを得なかったが、各支部のコロナ禍の下での対応を仔細に伺うことができて、幸いした結果となった。

冒頭、会長から挨拶があり、名誉会員の推薦や本年度の秩父宮記念山岳賞について触れたのち、山岳古道調査については、支部のサポートに期待を寄せているとのコメントがあった。

【公務報告】

まず、支部事業委員会を担当する坂井副会長から、支部特別事業補助金や「山の天気ライブ授業」、登山教室指導者養成講習会、全国支部懇談会の今後のあり方についての報告があった。

次に、支部会計および支部管理の銀行預金口座名義について、古川財務担当常務理事から要請があった。

3番目は、飯田記念事業委員会担当理事から、120周年記念事業の進捗状況について報告があった。グレート・ヒマラヤ・トラバースの仮報告、「エベレスト登頂50周年記念フォーラム」企画の内容、図書および資料のデジタル化と公開の報告など。

続いて萩原「山の日」事業委員会

担当常務理事から、全国山の日協議会について報告があった。

また、永田総務担当常務理事からは、今年度の年次晩餐会中止についてと、当会のコロナ対応とオンラインによる活動について報告があった。さらに、会員名簿の発行、新しい入会申込書の発行についての報告があった。

最後に、登山計画書の提出状況について、山本副会長から報告があった。

休憩を挟み、近藤理事から120周年記念事業の一つとして、全国山岳古道調査事業を開始する旨の発表があり、その趣旨や今後のスケジュール、調査方法などが具体的に示された(近藤理事が全国山岳古道調査プロジェクト・チームのリーダーを務める)。

【支部からの報告】

後半は、全支部に今年の会務の運営状況を伺った。

岩手支部のように、計画どおり全ての行事、会議を行なった支部。東京多摩支部のように、ほとんどを中止あるいは延期にした支部と大きく分かれたが、総じて、大人数が集まる集会や行事については中止、小規模なものは感染対策を

行なって開催していた。信濃支部のウェストン祭のように、大規模なものを極力小規模にして実行したイベントもあった。

実行するにしても中止にするにしても、先が見通せない状況下での、支部執行部の方々の決断と奮闘ぶりが、ひしひしと伝わってくる報告だった。

本年度の年次晩餐会を中止にします

日本山岳会会長 古野 淳

新型コロナウイルス感染防止のため、令和2年度(2020年度)の年次晩餐会を中止といたします。大人数の会食を伴う本行事はリスクが高いため、9月の理事会において中止と決定いたしました。

開催スタイルにも腐心しましたが、やはり「第3波」に対する危惧など先が見通せないためリスクが高く、断腸の思いでの決断となりました。

毎年、出席を待ち望んでおられる会員の皆さまも多くいらつしやるかと思いますが、ここに謹んでお詫び申し上げます。

REPORT

火打山の環境保全活動に参加して
ライチョウ生息環境の改善を目指して

越後支部 齋本修一

環境省では本年4月に「第二期ライチョウ保護増殖事業計画」を作成して、各山城等で取り組みを推進しています。

そのなかで、8月29日から2泊3日の日程で、環境省・信越自然環境事務所と妙高市が連携し、今年度の火打山の環境保全活動が実施されました。目的はライチョウの生息環境を改善・回復し、絶滅の危険性を回避することです。火打山(焼山を含む)は、ライチョウ



除去したイネ科植物の重量を計り、データを記録する

の日本最北の生息域であり、25羽前後の個体群が生息する、極めて貴重なエリアとなっています。

活動に参加したメンバーは、環境省の専門家、妙高市職員、上越環境科学センター職員、そして、ライチョウ・サポーターズと環境サポーターズ(市民・越後支部会員)などのボランティアで計38名。

火打山の状況と保全活動の実際

山頂周辺の調査活動は平成28年度から開始され、生息の阻害要因であるイネ科植物の除去作業を実施してきました。その結果、除去してきたエリアには、コケモモなどライチョウの餌となる植物が増加していることが判明。今年度は、この調査結果を活かし、広い試験区を2ヶ所設置して、イネ科植物の除去作業を実施することになりました。

29日の午後から、私たちは2班に分かれて調査試験区域に入りました。一つは山頂直下の急斜面(50

m×50mの範囲)。もう一つは、かつてライチョウがよく見られたライチョウ平の傾斜が緩い斜面(60m×40mの範囲)。私は山頂班でした。この範囲は今もライチョウが採餌場所として利用する大事なエリアです。

初めに除去対象となるイネ科植物を皆で確認します。その後、下側に一列に並び、両手間隔に広がり上側に向かって刈り取っていくのです。前方にはウサギギクなどの花が咲く中に、背丈の長いイネ科植物が繁茂しています。剪定^{ばさみ}や草刈り鎌を使って刈り取り、ライチョウの生息環境の改善を目指します。

作業中の留意点は、植生の踏み付け防止です。背丈の低い高山植物へダメージを与えないために、足元の踏み替えをしないことです。急斜面での低い姿勢での作業。足腰はもちろん腕にも力が入って汗する作業を続けました。この区域は2日目の午前中で終了。

一方、ライチョウ平の試験区域は傾斜は緩いものの、イネ科植物の密集度が高くてかなりの時間を要しました。山頂班の活動が終了した後、皆でライチョウ平へ移動。

かつてのライチョウ生息環境に回復させる、イネ科植物の除去活動です。除去しながら地面をよく観察すると、ハクサンコザクラやアオノツガザクラなどの植物が見られました。イネ科植物に圧迫されて、成長できなかったのです。皆の力で3日目の午前中にこのエリアの作業も無事に終了。

今後の保全活動につなぐ

作業中、ライチョウの発見はななく残念でしたが、私たちの作業を近くで見守ってくれているように感じました。再会を待ちます。

次年度からは、今回実施した2試験区域内の植物開花状況や、コケモモなど矮性低木の結実状況を継続調査することになっています。今回の除去作業は、範囲も広く作業のしにくい場所でした。参加者ももう少し多くいれば能率が上がったのではないかと思います。次回の活動には、県内外の多くの岳人の参加を強く願っています。

私は、今後もこの環境保全活動に参加し、高山の環境保全(ライチョウ保護を含む)の実際を体験的に学んでいきたいと思いました。

(越後支部自然保護委員長)

READING

「1968年ウシユバ峰の夏」に感動と歓声

東海支部 杉浦吉治

昨年の会報12月号の北海道支部・京極絃一氏執筆の「よみがえった1968年ウシユバ峰の夏―氷河から出てきた51年前の装備品」を読んで、感動し歓声を上げた。その理由は二つ。一つは51年前の装備品が発見されたこと、二つ目は山名の「ウシユバ」である。

一つ目の理由は、山ヤなら誰でも感動し歓声を上げるだろう。半世紀以上も前に海外の山で失くした装備品が発見され、しかも、それがロシアの岳人から連絡があつ

たのだから、京極氏の「まるで51年前の青春時代の薫りが漂ってくるかのような、刺激的なものだった」との想いに共感した。

出会いはエルブルース登山

実は、今から21年前のモン・ブラン、翌年のマッターホルンに続いて翌2001年にアフリカ大陸最高峰キリマンジャロ・キボ峰の登頂に成功してから、ある岳友におだてられて、無謀にも「セブン・サミッター」を目指そうとした。そんなことから、03年夏、ヨーロッパ大陸最高峰エルブルースに挑んだ(05年、南米大陸最高峰アコンカグアにも登頂できたが、実力の限界を悟り、「セブン・サミッター」は断念した)。

ご存じのとおり、エルブルースは決して難しい山ではない。基礎体力があり、高所順応さえうまくクリアすれば、誰でも登頂できる。ただ、夜中にガラバシ(ポチキル樽)小屋(3800m)を発ち、緩やかだが長い雪の斜面の登高は実

に辛い。しかし、やがて西峰(主峰、5642m)と東峰(5621m)の間のコル(5300m)近くまで登ると、空が明るくなり、登つて来た斜面の遠くに見事な美しい双耳峰の姿が目に入った。これがカフカズ山脈の写真集で見たウシバ(主峰、4710m)か、と感激したので覚えていた。

ここでザックからカメラを取り出して何枚か撮影した。息を止めて夢中で撮影していたら苦しくなり、目まいを起こしてしまった。「ああ、ここは5000mの高所だ」と気付き、幾度も深呼吸をしてなんとか滑落を防ぐことができた。

コルから左へ登り詰めると、やがて主峰の西峰に到達する。妻ともども登頂できた喜びは大きい。頂上でも何枚かの写真を撮影した。下山は疲労困憊で、やつとの思いでガラバシ小屋へ帰着した。しかし、清々しい気持ちで周りの景色を見渡す余裕はあった。

翌日は休養日のため、早朝から撮影に専念した。何点かのウシバ



入選作品「凜呼ウシバ」(エルブルースのガラバシ小屋付近から)

の中の1点が、その前年入会した日本山岳写真協会の全国作品展に入選した。初の応募なのに、審査員からは「双耳峰を取り巻く雲が面白い」という嬉しい講評をいただいた。

現地では、あの魅力的なウシバをもっと近くで撮影するにはどこへ行ったらいいか、とアトラストレック社の青山リーダーに尋ねたら、隣国のグルジア(現・ジョージア)へ行けばよく撮れる、と教えてくれた。



エルブルースのコル上部から遠望したウシバ(左上)

帰国後、あのとき見たウシバが忘れられず、なんとかして撮影したいと思っていたが、その地域は民族紛争が長く続いており、なかなかそれが叶わなかった。

グルジア・コーカサス撮影の旅

やがて、そのチャンスが訪れた。2014年、アルパインツアーサーピスの中川名古屋営業所長が、秋のグルジア・コーカサス山脈撮影の旅を企画してくれた。待ちに待ったチャンス到来！と妻同伴で参加した。

10月13日、関空から出発したが、台風によるフライトの遅れにより、ドーハからバクー経由でグルジア



秋色のウシバ南峰(旧グルジア・マゼリ村から)

のトビリシへ到着する予定が、イスタンブール経由となった。しかし、半日遅れたことを除けば、上々の撮影ツアーだった。

ウシユグリ村からマゼリ村への途中、ウグリ峠付近から眺めた、新雪をまとったウシバは最高であった。もちろん、ウシユグリ村で眺めた、朝光に輝くグルジア最高峰のシハラ(5068m)も、重量感とともに美しさではウシバには引けを取らなかったが、やはり長年の夢であった双耳峰ウシバは、シッターを切るのも忘れるくらい神々しく、美しかった。ここでは何十枚もの撮影を楽しんだ。

マゼリ村滞在の日、ウシバ南峰を至近距離から仰ぎながら、グリ谷までの撮影ハイキングは実にすばらしいものであった。

余談だが、途中で村の老人3人との忘れられない会話ががあった。「日本は大変だったね(東日本大震災のこと)。しかし、日本人は立派だ。救援物資を支給してもらうのに、きちんと並んで列を乱さなかった」ということである。こんなフカズの山中奥深くで、彼らはそんなことまで知っていたのか、と参加者一同感心したり驚いたりし

たものだ。そのとき以来、私はグルジア出身の力士・栃ノ心を応援するようになった。

山名「ウシユバ」のこと

さて、本題。二つ目の理由、山名の「ウシユバ」である。このときの撮影ツアーで物した作品を翌年の日本山岳写真協会展に応募したところ、2回目のウシバが入選した。作品のタイトルは「怪峰ウシバ」としたが、会場(東京都美術館)で、グルジアの山岳ガイドをしていたという留学生が、山名のスペルは「Ushba」であって「Ushiba」ではないので、発音は「ウシバ」ではなく「ウシユバ」です、と教えてくれた。

山名については、撮影の旅の案内小冊子に「ウシユバ」と表記してあったにもかかわらず、エルブルース登山の年に『フカズの山旅』(袋一平著、1968年、あかね書房)を読んだとき「ウシバ」と表記してあったので、そのとき以来すっかりこの美しい双耳峰は「ウシバ」と覚えてしまった。また、『コンサイス外国山名辞典』(吉沢一郎監修、三省堂編集所編、昭和59年、三省堂)ほか多くの山岳書

でもそのように表記されていた。

ところが、2016年に三省堂本店古書館で入手した戦前の出版『山岳征服の驚異』(編輯者仲摩照久、昭和8年、新光社)の「コーカサスの雄峰 エルブルース」の項を読んでいたら、写真の説明が「ウシユバの峻峯」とあった。

さらに、後日分かったことだが、写真集『世界百名山』全3巻(白川義員著、2002年、小学館)にも「ウシユバ」とあるではないか！この写真集はエルブルース登山の前に購入してあったのに、写真にばかり目がいつて山名表記に気が付かなかった。

このたびベテラン・クライマーの京極氏が明確に「ウシユバ」と表記されていたので、私もこれからは自信を持って、この美しい双耳峰を「ウシユバ」と表記することにしよう。

という訳で、京極氏執筆の「よみがえった……」は、懐かしさと嬉しきで感動し、歓声を上げたのである。紙上をお借りして京極氏に感謝申し上げますとともに、いつか氏のご著書『素晴らしき幸運な登攀』を見付けて、拝読したいと思っている。

地域発「山の日レポート」①山梨支部 山に囲まれ、山と向き合い、人との輪を広げる

山梨支部長 北原孝浩

「西に甲斐駒、北に八ヶ岳、東に茅ヶ岳・瑞牆(山)、南に遙か富士の山」——私の住む山梨県北杜市の市民歌「北の杜讃歌」で唄われているように、山梨県はどこでも四方を山々に囲まれ、山懷に抱かれている。富士山、北岳、間ノ岳は最高峰、2位、3位の山々である。

1997(平成9)年、国に先駆けて8月8日を「やまなし山の日」と定めた。県土の約8割が森林で、山や森林を見詰め直し、その恩恵に改めて感謝する契機にしようと



第10回「山の博覧会」における作曲家・故船村徹会員の講演

した。「山に親しみ、山に学び、山と生きる」をスローガンに、山梨県が独自に制定した「山の日」である。制定は全国でも早い方だ。この「やまなし山の日」には、いくつものイベントが行なわれたが、親子チャレンジ登山(親子登山)は、県内の山岳会が結束して参加してきた。

我が山梨支部は2005年から14年までの10年間、「山を知ろう、山へ行こう」をスローガンに、毎年欠かさず「山の博覧会」を開催した。スタート年は日本山岳会創立百周年に当たっており、登山の普及と山岳文化の継承を図る目的で実施した。それぞれの分野で著名な方々を講師に迎えての講演会で、登山や自然、山の歴史・文化に関心ある参加者は、毎回数百人を超えるほど盛会だった。JACは2012年に公益法人へ移行したが、その際には公益事業の優れたモデルの一つとして話題になった。

2015年8月11日、国民の祝日「山の日」がスタートした。山梨支部では制定記念事業として同年

9月に「やまなし登山基礎講座」を企画、開講したが、今年度はその6回目である。登山経験の浅い初心者や、登山の基礎を学びたいという中級者を対象として、30名程度の受講生を募った。

前5回までの受講生は中級者と思われる方が多かった。山に登ってはいるが山岳会に属さず、独自に山を楽しんできた人が大半で、この講座を通じて登山の基礎を学びたいと言う。「山の博覧会」は講演を聞くことであつたが、この講座では受講生が《学び、それを実践につなげる》場として計画した。

講座は9月から11月にかけて毎週開かれる。安全登山、装備、山の天気、地図の読み方、自然保護、山の救急医療、山の文学、山梨登山史、山岳写真、山岳遭難とその対策などの机上講座に加え、ロープワークとセルフレスキュー、地図読みなど3回の実践登山も行なわれる。県警本部による「山岳遭難講座」以外はすべて山梨支部員が講師を務めており、好評を博している。

地元の山梨学院に大変お世話になった。「山の博覧会」ではホールの提供と講師料の大半を同学院に



今年度6回目を数える「やまなし登山基礎講座」

負担していただいた。「登山基礎講座」でも最新設備の教室の無償提供、案内チラシの印刷・発送、受講申し込み受付などの募集事務、さらに受講生に配布するレジュメの印刷など、同学院生涯学習センターの全面的なご支援を得た。ありがたい環境の下での講座である。今年度(開講中)は、山梨学院大学スポーツ科学部のご協力もいただいた。

受講生には講座終了後、支部山行への参加を勧め、講座で学んだことを復習実践する機会を提供する。そして、山岳愛好者として互いに学び、山を楽しむ輪を広げ、それが会員増につながれば幸いである。

REPORT

今春の伯耆大山における滑落事故報告

広島支部 勝田直樹

事故の概要

2020年3月7日、伯耆大山（以下、大山）において日本山岳会広島支部アルパインクラブ・ユースに所属する3人のパーティが弥山尾根東稜を登攀後、西稜を下山中に2名が滑落し負傷、鳥取および広島両県警のヘリコプターで救出される事故が発生した。負傷した2名はそれぞれ米子市内の病院に搬送され、リーダーが肩甲骨骨折



ほかで1週間の入院、もう1人は胸部打撲による肺気腫ほかで2週間の入院となった。

事故の詳細

メンバーは海外6000m級の未踏峰登頂の経験もある29歳のリーダーと22歳の2人を合わせた3名のパーティで、うち1人は冬山1年生であった。

3人は5時に南光ヶ原駐車場を出発し、6時にベースとなる元谷小屋に荷物をデポ、6時15分に東稜に向かって出発した。

今年は例年に比べ降雪量も少なく、ラッセルを強いられることもなかったため、6時50分に東稜取付まで到着する。午後からは天候が崩れる予報であったが、午前中は問題ないと判断し登攀を開始する。雪はよく締まって状態は良く、3人は速いペースで東稜を登った。雪山1年生も、歩く力は所属大学の山岳部で鍛えられていたので強かった。8時20分、弥山山頂到着。ここまでにロープを出したのはた

った1回のみである。

計画では、このまま一般登山道である夏山登山道を通って下山する予定であった。しかし、東稜登攀をハイペースで登れたことと、難しいルートに挑戦することで、さらに良い経験を積むことができているのではないかと判断から、下山ルートを夏山登山道ではなく西稜に変更した。

この計画変更が事故を起こす大きな要因となってしまった。8時40分、西稜を下山開始。3人のうち2人はこのルートを登った経験があるため、ルートは知っているつもりではあった。しかし、登りと下りでは判断の感覚は異なっており、下山を開始してすぐに尾根を間違え、西稜ではなく支尾根を下ってしまった。

間違いに気付いた3人は、正規のルートに戻るために2つの谷を渡るトラバースを行ない、正規のルートへ戻るといふ選択をする。一度目のトラバースはことなきを得たが、二度目のトラバースで雪山1年生が足を滑らせて滑落してしまう。それを見たリーダーはパニックになり、滑落していった斜面を走って追い掛けていくが、バ

ランスを崩して自身も転倒し、雪の斜面を標高差240m、距離にしておよそ350m滑落した。2人は約10m離れた位置でそれぞれ停止した。

その後、2人は現場から警察に救助を要請し、滑落した2名と事故発生現場に残っていた1名も鳥取県警および広島県警のヘリコプターによって救助された。

今回の事故を受けて、広島支部アルパインクラブ・ユースは全ての活動を自粛。ユース・メンバー全員で原因と問題点を洗い出し、今後の広島ユースのあり方や進め方を議論した。そうやって完成した報告書を読み返すと、当然のことながら、当然のことながらできていなかったのだと改めて反省するばかりである。

今後は、当たり前のことを当たり前に行なうということを大切に、山での事故は二度と起こさないようにしていきたい。

最後になりましたが、今回の事故でご心配並びにご迷惑をお掛けしました全ての方々に、深くお詫びを申し上げます。

(広島支部アルパインクラブ部長)

東北 西南

深田久弥の荒沢岳登山

遠藤俊一

本会報の、本年7月号の「東西南北」欄に前田英昭氏の「深田久弥と荒沢岳」の一文が載った。登山ガイドの「深田久弥も登れなかった山です」という意外な発言に疑問を抱いた前田氏は、深田久弥の著作や「深田久弥・山の文化館」の見解、そして、伝之助小屋主人の話から途中まで登ったが登頂できなかったというのが真相ではないか、と述べておられる。

この一文が越後支部会員の一部でちよつとした話題となり、私なりに調べてみた。

まず、私の山日記を紐解くと、同じ年の10月20日に伝之助小屋から荒沢岳を往復している。約50年も前のことであるが、誰にも会うことなく淡々と晩秋の登山道を往復

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします)

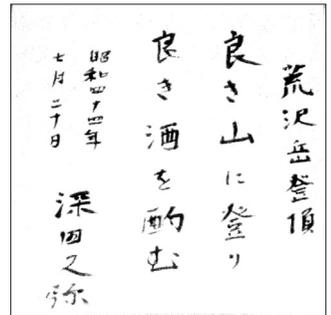
した、との記録がある。

この登山道については、越後の山の名家内書「越後の山旅・下巻」(藤島玄著)の荒沢岳の項に「主として、奥只見山岳会の手で登山道の伐開がすすみ、昭和三十四年七月五日を以って、山開き祭をしている。」とある。

また、伝之助小屋には深田久弥が登頂日に残した2枚の色紙が残されている。1枚には「荒沢岳登頂 良き山に登り 良き酒を酌む 昭和四十四年七月二十日 深田久弥」とある。もう1枚には、荒沢岳と思われる山の絵の下に「近藤恒雄 村尾金二 深田久弥 July 20 1969」とある。

そして、聞くところによれば、この山の紀行文はないとのことである。

これらのことや友人の望月達夫に宛てた葉書からして、登頂したと考えるのが妥当ではなからうか。



深田久弥の荒沢岳登頂後の色紙



3名の署名入り色紙

深田久弥が著名な登山家として、山頂を踏んでない山に「登頂した」と書くだろうか。山頂に到達して初めて登頂したとするのが登山家としての矜持ではないだろうか。

近藤恒雄と村尾金二と3名で荒沢岳に登頂して、登山口の伝之助小屋で色紙を書きながら、良き酒を酌み交わしているのではなからうか。

私は、深田久弥氏が長い登山道を登り切って、山頂に立ったと信じていた。(越後支部会員)

その名はベント

夏原寿一

今、パソコンに向かつて原稿を書いている私の部屋の壁に1本のピッケルが掛けてある。その名はベント。そのベントがここに来た経緯を話そう。

1977年の秋、ヨーロッパ数ヶ国への出張の際に、スイスの取引先を訪問したときのことである。予定していた打合せがすべて終わった後、担当者とは街に出て食事をした。

食事をしながらの話題は技術屋同士の堅い内容で始まったが、そのうちお互い山やであることが分かった。彼は「日本にもアルプスがあつて、森林限界は2500mくらいだそうだが」などと日本のことに詳しい。そこで私が「日本のアルプスにはマッターホルンもありませんよ」と言うと、彼は「マッターホルンは世界中にあるけど、ここにあるのが真正正銘のマッターホルンですから(笑)」と。そんなわけで話は大いに盛り上がった。帰国してからお札状を出したのだが、そこに「今度スイスを訪れた

ら、グリーンデルワルトに行つてベントのピッケルを注文したい」としたためた。しばらくすると返事が来て「ベントに電話をしたら」当人の身長と体重が分かれば作る、代金は120CHF（スイスフラン）、納期は3ヶ月と言っているので、良ければ連絡を」とある。即、お願いしたのは言うまでもない。

翌年の初夏、段ボール箱に入ったピッケルが船便で送られて来た。ピッケルには、あの楕円の銘が、その裏には私の名前が「J.NATSU-HARA」と刻印されている。シャフトに亜麻仁油をたっぷり染み込ませて初めて雪の上に持ち出したのは翌年、残雪の八方尾根だった。

付記

*「身長175cm、体重65kg」と伝えてでき上がったピッケルのサイズは、全長79・5cm、ヘッド長26cm、重さ930g。

*「120CHF」は当時、約1万4000円。因みに、山靴で有名な「山友社たかはし」で1957年ごろに貰ってきたカタログを見ると「ベントピッケル9700円」とある。ついでながら、ウィリッシュは6600円、

門田は3800円とある。

*その昔、アルプスの麓で農機具などを作っていた鍛冶屋の親爺さんが、山に入る人々の求めに応じて作り始めたピッケル。谷間の村に槌音を響かせながら1本1本鍛え上げたピッケルを持つことは、岳人の憧れであった。ベントはそうした職人の一人、ほかにシエンク、ウィリッシュ、シモンなどが有名だ。この小文は、そんなベントの作を手にした話である。

東近江に西堀榮三郎記念「探検の殿堂」を訪ねて

小原茂延

かねがね滋賀県東近江市（旧湖東町）の西堀榮三郎記念「探検の殿堂」を訪ねたいと思っていた。西堀榮三郎は京都一中時代に今西錦司らと山城30山を登り、三高時代は南アルプス・北岳などの積雪期における登山記録を樹立した。また、鹿沢温泉において仲間と「雪山讃歌」を作詞したエピソード、単身ネパールに入国してマナスル登山の許可を得るなどの活躍、その後には

南極観測隊の第1次隊の副隊長および越冬隊長として、また、京都大での教育者、民間企業・東芝に転身して真空管の発明、デミング賞受賞、再び京大教授として、さらに原子力の平和的利用の分野、船の設計など多岐にわたる活躍は実に類を見ない達人である。

今回はまずお盆（新・7月半ば）でもあるので、京都の銅閣（祇園閣とも）、龍池山大雲院にある西堀家の墓にお参りしてからのスタートとした。ただ、この寺は一般に公開されることはめったになく、その期間も限られている。もともと織田信忠公の菩提を弔うことから建立された寺であり、寺の名もその戒名から来ている。なお、祇園閣は旧財閥・大倉喜八郎が着想して自分の別邸・真葛荘に建築させたものだが、変遷の結果、大雲院の所有となった経緯がある。

京都から琵琶湖線で近江八幡駅下車、ここは関白秀次が八幡城を築いて町造りをした所であり、当会の名誉会員である中村純二先生のご出身地でもある。先生の温顔を思い浮かべながら、近江鉄道に乗り換えて太郎坊のある山などを眺めながら園地帯を走り、八日

市駅に着く。駅からのバス便が少なく、東近江市横溝町の記念館までタクシーの往復となった。この旧湖東町に京都市出身の西堀榮三郎記念館がなぜあるのか、当初は不思議な気がしていたが、調べてみると祖父の清兵衛がこの地の出身だった縁によるようだ。近江商人の言う「三方よし」の精神を今回知ったが、西堀も大いに受け継いでいたのだろう。

さて、「探検の殿堂」の外観は西堀の好きだった船を思わせる形状で、コンクリートの打放しの仕上げ。傍らにはやや大きい池があつて海を思わせる。定礎は1994年8月とあつた。

この施設の開館に当たり小冊子が刊行され、序文に梅棹忠夫が「いままぜ探検の殿堂か」を寄せており、「この町（旧湖東町）にゆかりの深い、すぐれた探検家である西堀榮三郎氏を記念するとともに、日本人の手になる近代探検の歴史と探検家たちの業績を顕彰するための施設です。そして、それは単に過去をふりかえるためだけでなく、これらの先人たちによって育まれた日本人の探検精神を、未来に向けて、更に大きく羽ばたかせ

るための装置なのです……。」と書いている。この意味することは、かつて、木暮理太郎の生誕地である群馬県太田市に記念碑が建てられ、その碑に刻まれた西堀榮三郎撰文「山登りは先人の肩に乗って先へ上へ進むものだ」とその精神は軌を一にしている。

殿堂入りの探検家49名は、吉良竜夫、近藤良夫、樋口敬二、本多勝一、梅棹忠夫(委員長)の5名の選考委員会により1994年までに選ばれ、梅棹が委員を辞した後新たな顕彰者審議会が2003年になって梅棹忠夫を推挙して50名となった。探検家は日本画家の描いた肖像画とともに、その業績が付され顕彰されている。

参考Ⅱ梅棹忠夫『山をたのしむ』

図書交換会中止のお知らせ

年次晩餐会で開催されていた図書交換会は、(晩餐会中止に伴い)今年中止に決まりました。毎年、楽しみにしていた会員の方がいらつしやるかと思いますが、お知らせいたします。

図書委員会



山行委員会

熊野古道・中辺路山行に参加して

熊野古道・中辺路山行(9月25日)に参加した。4泊5日の行程である。以前から一度歩いてみたいと思っていた。しかし、広島からの参加者は自分一人という。人見知りする自分にとっては、期待と不安が入り交じった心持ちで当日を迎えた。少し身構えて集合場所に向かったが、参加された方々は皆、気さくで親切な方ばかりだった。すぐに打ち解けること



最終日は大雨に見舞われた

活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

ができ、安心した。

石畳が続くロマン漂う古道を、古の人々に思いを馳せながら歩いた。古道沿いに黄色のホトギスに似た可憐な花が咲いていた。あれは和歌山県のレッドデータブックで準絶滅危惧種に分類されているチャボホトギスであろうか。地面に接するように黄色い花を咲かせ、一服の清涼剤となった。お陰で、私にとっては長い行動時間もさほど苦にはならなかった。本宮手前の展望台から見えた大斎原は圧巻で、思わずシャッターを切り、家人にも送った。歌碑が点在し、胎内くぐりや熊野本宮大社よみがえり、川湯温泉など、多くの楽しみもあり、疲れを忘れさせてくれた。めはり寿司もうまかった。最終日には、登山装備のままの滝行のごとく大雨に見舞われた。電車もストップし、帰途につけなくなるアクシデントがあった。身



スギの樹林帯を下るメンバー

も心も洗い清められ、背負っているものが少し軽くなったような気がした。お陰で温泉につかり、地元食材に舌鼓を打ち、酒をたしなむことができた。それもまた山行の醍醐味の一つだと思ふ。

歴史と文化に触れ、楽しくもあり、厳しくもあり、清々しさが残る山行であった。企画された征矢リーダーに感謝。今度は家人の許しが出たら、小辺路の方にもふらりと旅してみたいと思っている。

また、参加者の皆様にはいろいろとお世話になり、ありがとうございます。機会がありましたら、ご一緒できたらいいですね。

(坂原忍)

支部



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

四国支部

コロナ禍の中で

人と登山

春から半年間で、四国支部の大きな行事を中止または延期した。一つは小島鳥水祭で、もう一つは山陰、広島両支部との交流会だ。多くの人たちにご迷惑を掛けていると思う。コロナに感染しても治してくれる薬ができるまでは、支部が柱で関わる行事の開催、中止について、少々思い切った判断をする必要があると思っている。

ただ、支部内では個人活動までは強く制限していない。大自然の中なら感染リスクが低い、と考えるからだ。それでも「登山と同じように先々の危険の回避を常に忘れないで」と呼び掛けている。

山登りや山での生活を通じ、生の実感を心身で味わう喜びや、仲間と信頼し合って達成する危険回

だより

避と成功時の感激、動植物や景観が与えてくれる感動を知ってしまった人に対し、登山を中止させることほど酷なことはない。そんな陳腐な言葉も見付からない。

私もここ最近2度、四国で沢登りをした。感染者が目を追うごとに増えている状況下だが、祖谷山系にある沢では往復約13時間、誰にも会わなかった。もう一つの剣山山系の沢でも往復約8時間、メンバー6人以外誰もいなかった。

そして、やはり行って良かった。滑ったり落ちたりしないよう五感と技術と道具で対処し、迷わないよう空間を瞬時に想像する力を発揮した。眼鏡を落とした人もいたし、ある人は沢足袋のフェルトが剥がれるというハプニングもあったが、なんとか切り抜けた。それまでの登山で養われた真剣さと集中力と知恵の出し合いが、不思議とそんなときに発揮されるものだ、

と思った。

2度目の沢登りでは笹原から稜線に出た途端、覆っていた雲が散り散りになり、ブロッケン現象が見えた。参加者6人のうち3人が初めて見たと喜んだ。3人は二、三十年前にドイツのブロッケン山で初めて見た人と同じ感動を味わったに違いない。沢登りをしたどちらの山も、一般登山道を使えば約2時間で登ることができ、沢をたどったお陰で、参加者のそ

の山に対するイメージも必ず変わったはずだ。

登山の恩恵は、たまたま山登りというスタイルで人間のあらゆる能力を開発し、訓練してくれることにあるのではないだろうか。人間の能力は様々な環境に順応したり対処したりする力があると思うから、コロナに効く薬もやがて開発され、伸び伸びと山に登れる時代が戻ってくると信じている。

(支部長・尾野益大)

図書紹介

大学的 富士山ガイド

——こだわりの歩き方

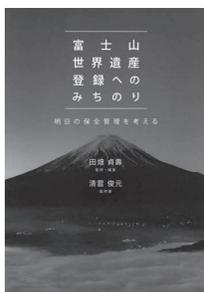


2020年2月
昭和堂
菊判 244頁
2300円+税

都留文科大学編

富士山世界遺産登録への みちのり

明日の保全管理を考える



2020年2月
ぶんしん出版
菊判 334頁
1800円+税

田畑貞壽／清雲俊元監修編著

『大学的富士山ガイド』

富士山の北東麓25km、富士急行(旧登拜路)沿いの人口3万人余の小さな都留市に、コンパクトな都留文科大がある。本書は「富士山に最も近い公立大学」を標榜する教授陣が「都留市と都留文科大の視座から富士山の学問的な歴史や魅力を発信する」という狙いで専門分野ごとに執筆を担当している。この大学では富士登山はじめ、自然科学や人文科学に関する「富士山講座」が履修できるといふ。

取り上げられたテーマは、江戸の民衆史に欠かせない「富士講」に始まり、「富士塚」の歴史と現状、伝統的登拜に欠かせない「胎内潜り案内」、市内の句碑を巡りながら芭蕉の足跡を解説する。描かれた富士山―聖徳太子から横山大観、また開国当時に西洋人が描いた富士山など。最終章では富士山の大自然と世界文化遺産(2013年登録)と環境保全の問題点を論考し、自然観察のポイントを解説して百科事典的案内を締めくくっている。

巻末に54ページにわたって英文解説が付けられていて、英文科の主任教授が編集に関わっているだ

けに充実している。多くの外国人が富士山に来訪するこのごろ、本書と富士登山地図を携えれば、富士登山と山麓探訪はより充実するに違いない。もちろん我々日本人の富士山愛好家も、本書によって一味濃い富士山麓の旅ができるだろう。改訂の折にはカバー(表)に英文タイトルと「英訳付き」を英文追記して欲しいものだ。

『富士山世界遺産登録へのみちのり』

富士山は山頂を囲む市町村や関連団体の長年の努力が実って2013年に「世界文化遺産―信仰の対象と芸術の源泉」としてユネスコに登録された。

登録実現までの問題点とその解決策を列挙して、20年にわたって信仰や芸術的価値のある遺構や事跡の収集、調査の経緯が明らかにされている。ゴミ処理問題や周辺に開通している自動車道路、観光事業などに関する行政の各部門との調整と問題解決過程を精査している。

世界遺産登録申請をする自治体の担当者や文化的遺跡や自然環境保全活動に携わる人たちに、好適

な参考書あるいは手引きという一書だろう。(松澤節夫)

日本ネパール協会編
現代ネパールを知るための60章

2020年5月
明石書店 397頁
四六判 2000円+税

ネパールはインドと中国という2つの大国に挟まれた小さな内陸国である。国土は北海道の約1・8倍。世界最高峰のエベレストを筆頭に氷雪嶺がひしめき合うヒマラヤの国として世界に知られている。他方、地政学的には両大国の緩衝地帯として微妙な立場にある。ここでは亜熱帯から極寒帯まで気候が垂直分布し、複雑に入り組んだ険阻な地形が民族や文化にも影響を及ぼし、多様な状況を人間社会につくり出している。

本書は、そうした多様性に富むネパールの各分野で活動した執筆陣によるものだけに内容も多面的かつ多岐にわたっている。

ネパールは開国以来、民主化運動、マオイストによる「人民戦争」、連邦民主共和制への移行、王制廃止、新憲法公布、コロナ禍による入国制限など、現在に至る70年ほどの間に目まぐるしく様々な局面を見せてきた。ひと言で言えば近代国家を目指し、民主化を基軸にした激動の時代だったと言えよう。

将来はどうなるものか。依然として両大国の狭間でバランスを強いられることは間違いないにしても、中国の進出には世界的に見ても目覚ましいものがある。昨年、私はチベットを旅行し、国境の街・キロンからネパールに抜けてきたが、チベット側のインフラ整備は凄まじいばかりで、その勢いはネパールに迫りつつある。

チベット側の舗装道路は、ネパールに入ると泥濘の凸凹道に一変する。当初、私は最寄りの村から乗り合いバスでカトマンズに出るつもりだったが、雨季のさなか、腰痛持ちの身にはいささか応えるようなので、チベットを出国する前日、迎えのタクシーを手配した。

チベット人の知人がネパール側と連絡を取り、タクシーが国境まで迎えに来るよう全てスマホで処

理したのだ。情報通信技術が発達した現代の便利さを知らなかった私は大変驚いた。と同時に、自分の時代遅れの感覚を思い知らされ愕然とした。さらに走行中、タクシーの運転手に掛かってきたスマホを手渡され、相手が私の仲間のネパール人と知ったときの意表を突かれた驚きは、さすがに腰を抜かさなばかりだった。ヒマラヤ山中といえども、そういう時代なのだという認識が、私には全く欠落していたことを痛感せざるを得なかった。

本書はタイトルが暗示するように、ネパールの現代を知る上で大いに役立つ一冊である。私自身、長年親しんできたネパールだが、知らなかった面を改めて多々知ることができた。

(根深 誠)

冬の旅 ザンスカール、 最果ての谷へ

山本高樹著



2020年4月
雷鳥社 288円
A5判変形 定価1800円+税

インドの北西部カシミール州の高地、ザンスカール。ヒマラヤ山脈の西の外れに位置し、平均標高は約3500m。半砂漠地帯であるため1年を通して降雨量は少ないが、冬季はマイナス20℃を記録することもあるほど厳しい環境で、雪により外界から隔絶されてしまう地域だ。寒さが最も厳しくなる1月上旬から約1ヶ月間だけ、ザンスカールと外界とをつなぐ幻の道「チャダル」が現われるという。この幻の道は、ラダック地方へと流れるザンスカール川が凍結することのできる、氷の道だ。

筆者は、11年前にもチャダルをたどってザンスカールを旅している。取材を続けるうちに「彼らの風習や行事、生活の背後には、自然という大きな存在が常にあることを、強く感じるようになった」。そして、「彼らはなぜ、この厳しい世界で生きることを、選んだのだろう……」と考えるようになったという。問いの答えを探するため、前回の旅よりもさらに奥深いルンナク地方の先にある古刹、プクトル・ゴンパを目指し、そこで行なわれる祭礼、プクトル・グストルを見るとき、1ヶ月に及ぶ旅をまと

めたエッセイだ。

前置きが長くなったが、本書では旅の目的地であるプクトル・ゴンパにたどり着くまでの12日間の旅の中でも、特に点在する集落で出会う人々とその暮らしが特に細かに記録されている。

「ヤクに追い掛けられた」と、泣きべそをかきながら帰って来る子どもや、3年に及ぶ長い瞑想中の修行僧の世話をする若者と少年僧、ツァジャ(塩茶)を入れる妻の隣で、ブン(チベット仏教の簡易版の経典)を広げ唱える夫……など。

いつび割れるとも知れない氷の道や崖に付けられた道を、神経をすり減らしながらひたすらに歩き、立ち寄った村で出会う人々との交流と、そこで目にする暮らし。この旅には、凍えるような冷たさや極度の緊張と、それを温かく解きほぐすような、人々とのやりとりが交互に訪れる。厳しい環境に行く旅人のみならず読み手にとっても、これは救いである。と同時に、現地の人々にとっても、こうした環境で捧げる祈りや人とのつながりは、同じように救いであり、そして日常でもあるのだ、ということに気付く。

旅の終着点であるプクトル・ゴンパでの出来事は、ほんの数ページにまとめられている。チャダルを経ての旅がいかに長いかを表わしているようだ。

真つ白な氷と雪と、僧侶が身にまとう臘脂えんじの袈裟と。エッセイの間に挟み込まれている写真からは、寂寞とした自然と、静かであるが強い、現地の人々の生命力が伝わってくるようだ。対照的なようにして、厳しい自然と人々の暮らしとは繊細なバランスで、そして密

接につながっていることを感じさせられ、見入ってしまう。

道中に立ち寄った集落の男性に投げ掛けられた「こんな大変な場所に生まれて、人生を送ることに意味はあると思うか?」という問いに対し、その場では即答できなかった筆者が、旅の終わりに思うことは……。人々の営みや彼らとの交流から導き出された答えが、じわりと染み入るようだった。

(黒尾めぐみ)



令和2年度第5回(9月度)理事会

議事録

日時 令和2年9月9日(木)19時00分～21時30分

場所 集会所およびオンライン

【出席者】 古野会長、野澤・山本各副会長、永田・萩原・古川各常務理事、安井・清登・清水・飯田・柏・近藤各理

事、石川監事

【欠席者】 坂井副会長、黒川監事

【オブザーバー】 節田会報編集人

【審議事項】

1・監査法人との財務に関しての指導・助言業務契約の継続について

当年度の太陽有限責任監査法人

との財務に関しての指導・助言業務契約の継続について審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

2・寄附受入れの承認について

寄附受入れおよび管理規定第3条2により東海支部への寄附100万円の受け入れについて審議した。(賛成12名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・コロナ対応における新たなHPでの告知について協議し、支部合同会議において支部の意見を聞くことにした。(古野)

2・支部合同会議の議題について協議した。(永田)

3・評議員懇談会の議題について協議した。(永田)

4・改革事業推進委員会について協議した。(古野)

5・名誉会員の推挙について協議し、評議員懇談会で評議員の意見を聞くことにした。(古野)

6・公益法人運営委員会の報告をし、寄附などについて協議した。(古野・永田)

7・本年度の年次晩餐会の実施について協議し、中止とした。(永田)

【報告事項】

1・入会希望者10名、準会員入会希望者2名について入会承認を行なったと報告があった。(古野)

2・寄附金15件の受領について報告があった。(古川)

3・神尾理事死去に伴う医療委員会担当理事について、古野会長が兼務するとの報告があった。(古野)

4・国際委員会の委員長交代について報告があった。(古野)

5・会員名簿の作成実施について報告があった。(永田)

6・自然保護委員会全国集会の開催について報告があった。(飯田)

7・102号室の図書にカビが発生したとの報告があった。(清水)

8・新しい入会申込書の実施について報告があった。(永田)

9・同好会「アルピニズムクラブ」設立について報告があった。(永田)

10・オンラインで行なわれた新入会員オリエンテーションについて報告があった。(永田)

11・会報「山」9月号の発行について報告があった。(節田)

*8月12日、闘病中だった神尾重則理事が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

ルーム日誌 9月

- 1日 常務理事会 スケッチクラブ
- 2日 山行委員会
- 3日 山岳地理クラブ
- 4日 アルピニズムクラブ
- 5日 総務委員会(新入会員オリエンテーション)
- 7日 総務委員会 スケッチクラブ
- 8日 フォトクラブ 二火会
- 9日 理事会 緑爽会 山想倶楽部
- 10日 アルピニズムクラブ 九五会
- 11日 図書委員会
- 14日 資料映像委員会 スキークラブ
- 15日 デジタルメディア委員会
- 16日 つくも会 三水会
- 18日 会報編集委員会
- 23日 家族登山普及委員会

- 24日 財務委員会 記念事業委員会
 - 25日 山遊会
 - 29日 総務委員会 二火会
 - 30日 山岳古道調査プロジェクト
- 9月来室者 238名

会員異動

物故

- 北島光子(4305) 20・8・15
 - 清水芳美(5686) 20・7・29
 - 土橋進一(6507) 20・7・19
 - 東 一男(15393) 不明
- 退会**
- 鈴木幸子(15019) 東海
 - 三上 佑(15877)
 - 竹内恭江(16013) 東京多摩
 - 原 太郎(16360)
 - 橋本 秀(16378)



インフォメーション



◆スキー懇親会のお知らせ

山行委員会

令和3年1月のスキー懇親会は、パルコール孺恋スキー場で開催し

ます。

日程 令和3年1月25日(月)〜28日

(木)

費用 3万円

通信費、保険料、宿泊懇親会費用などを含む

宿泊 孺恋の宿 あいさい

定員 15名

現地集合・現地解散

申込み 12月20日までに、会員番号、住所、氏名、年齢、電話などを明記し、郵送、FAX、☎で高橋聡まで。

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-10

FAX 03-3222-0908

☎ sanko@jac.or.jp

*参加申込み者には詳細案内をお送りいたします。

『山岳』2020年のお詫び

先ごろ刊行された『山岳』2020年版(第115年)の「委員会の活動報告」欄、資料映像委員会のページで、編集の手違いにより同委員会からの訂正文が反映されませんでした。関係の皆さまに大変ご迷惑をお掛けいたしました。お詫び申し上げます。

『山岳』編集委員会

◆編集後記◆

●今号の5ページにあるように、「日本の山岳古道120選」調査事業がスタートします。様々な人々が踏み締めてきた「道」には、歴史や文化、生活などの香りが漂っています。10年ほど前、芭蕉の『奥の細道』の全行程を回ったことがあります。印象に残っているのは、山形県の山刀伐峠です。

●この峠は中世の昔から南部と出羽を結ぶ要路ですが、芭蕉一行は「必ず山賊などが出る」と脅かされ、屈強の若者を案内人に立てて越えています。峠には碑があり「高山森々として一鳥声きかず、木の下の闇茂りあひて、夜る行がごとし。……」と峠越えの一節が刻まれています(加藤楸邨筆)。こんな峠道こそ「120選」に選ばれるのではないのでしょうか。(節田重節)

日本山岳会会報 山 905号

2020年(令和2年)10月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社